

## 編集後記

鶴崎明彦先生の退職記念号を無事に刊行することができた。ご寄稿いただいた方々をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げたい。

思えば、鶴崎さん（普段の呼び方で書かせてください）の教授会デビューは鮮烈だった。「鶴崎で～す。よろしくお願いま～す。」鶴崎さんの教授会での新任着任挨拶は、これだけだった。自己紹介も何ものなしの、シンプルさを極限まで追求したミニマリズムは、第一印象としてはかえってあまりに強烈すぎるインパクトがあった。しかも、ちょっと強面で（ごめんなさい）体格もがっしりしていて、「この人は何者だろう」という素朴な興味を惹かれたのは、筆者だけではなかったと思う。

鶴崎さんとのように親しくなったのか、正直、はっきりとは思いつけな。というも、各種委員会の仕事で一緒するようなことは、実際にはほとんどなかったからである。ところが、鶴崎さんには日吉でも三田でもキャンパスでよく遭遇した。立ち話を繰り返すうちに、とても気さくな方なのだとわかった。いつしか互いの言葉使いもインフォーマルになり、「オイ、トオル～、オマエ～」のように話しかけられて、筆者もほとんどため口のような口のきき方をするようになっていった。筆者にとってこの種の会話ができる他部門の先輩は、鶴崎さんだけである。

鶴崎さんとは授業や学生の話をよくしたものだが、真面目で、繊細で、包容力のある先生だということがいつも伝わってきた。鶴崎さんを見つけると話しかけたくなるのは、そうした鶴崎さんの魅力

に負うところが大きい。ある時、地域文化論の授業のパワーポイントを見せていただいたのだが、丁寧に作られたスライドの数々に「ここまで準備するなんて」と驚嘆した。「これくらいやってやんねえと、学生わかんねえだろ」と鶴崎さんは平然とおっしゃるのだが、授業の準備に相当な時間をかけておられる様子が垣間見えた。

鶴崎さんは、常に何かに全力投球される方である。だから、定年退職後も、「やれやれ、のんびりできる」とか言いながら、実はご自身で新たな研究目標を設定して、それに打ち込む生活を送られるのではないかと思う。その節は、是非また『教養論叢』にご寄稿いただきたい。末永きご健康をお祈り申し上げる次第である。

(編集委員 鈴木透)